

[others]

岐路に立つ同窓会活動

学友会副会長 西谷 源展

昭和 45 年に本学を卒業した私は、そのまま母校に教員としてお世話になったために、学友会理事としては昭和 47 年から関与している。35 年間にわたり同窓会である「学友会」活動に関与してきたことになる。その間に活動に関与してきた立場より、同窓会活動について考えてみたい。

1. 学友会財政

本会の財政を担当理事としてお預かりをしている。

本会の会費は、現在は終身会費制としている。これは、専門学校 36 回生以後である。36 回生以後の卒業生はすべて終身会費が納入されている。それ以前は、任意で終身会費を納入した会員と、年度会費として年間 3,000 円を納入する会員に分かれている。

現在、年度会費の会員は約 130 名程度と非常に少ない。現在の終身会費は昭和 60 年(1985 年)に 30,000 円として以来 22 年間改定せずに据え置かれている。

しかし、終身会費制を採用し、積み立てがなされている同窓会は少ないといえる。年度会費制を採用している同窓会は、会費徴収がうまくいかずに財政が破綻状態にある。本会の収入は、在学生の準会費と年度会費が 18%、終身会費から 40%、広告料 23%、名簿頒布収入 11%となっている。終身会費は 65%が一般会計に使用され、残り 35%が積み立てされている。終身会費積立金を取り崩す事態にはなっておらず、少しずつながらも積み立てられている。母校が 4 年制大学になったことで在学生の準会費の増加は 3 年後に見込める。しかし、一方では毎年 80 名の正会員が増加するために、卒業生数が一定になるまでは、支出は増加してくる。終身会費の積み立てができなくなる時には、現在まで 22 年間据え置かれている終身会費の改定が必要になる。

2. 会員組織

本会は強固な会員組織を有している。全国の診療放射線技師養成施設では本会を高く評価している。しかし、種々の本会活動に参加する会員は専門学校の卒業生が主である。短大卒業生の参加者は増加しているものの少ない状況にある。このことはほとんどの同窓会組織でも同じ傾向で、若い会員の参加をどのようにしたらよいか模索している。

同窓会組織の根幹は会を組織する会員を把握することにある。本会では 2 年ごとに「会員名簿」を発行している。本会の財政もこの名簿の広告料や頒布収入によって 1/3 が賄われている。したがって名簿の発行は本会にとって重要な財源でもある。しかし、近年は「個人情報保護法」による過剰ともいえる保護策によって同窓会名簿の作成がなされず組織の壊滅につながるケースも生じている。ある高等学校では、卒業生名簿、住所が母校から同窓会に知らされないために組織そのものが壊滅に向かっている。

本会に時折卒業生を名乗って詐欺まがいの名簿購入の申し込みがある。そのほとんどが、過去数年にわたり行方不明の卒業生である。本会では、このような場合には必ず本人確認を実施している。本人しか知りえない情報を問いただすことによって、今までに数件の名簿詐欺を阻止している。本会では「個人情報保護に関する会員名簿取扱規定」を制定して適切に管理することも行っている。もう 1 つの本会の重要な組織として、支部組織がある。本会事務局や母校に支部総会の開催通知があった場合は、可能な限り出席することとしている。これも全国の会員組織を強固にする上で重要である。さらに 2 年毎に開催している総会も本部、支部を交互に行っているが、これも支部活動の活性化として重要な役割を果たしている。

同窓会活動が、ほとんどの会で沈滞、壊滅状況にある中で本会では順調に推移しているのは支部、

母校との連携がよくなされていること、これまで本会の歴史を築いてこられた先輩諸氏の功績である。さらに今後も学友会を発展させることが私たち役割であろうと思う。

以上

* 通巻 185 号 2007 年 10 月 1 日発行 (H19-No.3) より